Junshin News

特集.2

# あの人の続きを生きる

純心女子学園創立記念日特別講話【2020・12・8】

人文学部 教授
古巣 馨

## 折れそうな心で

「大阪や北海道への移動は、緊急でないかぎり自粛してください。不要不急の外出は避けてください」連日、マスコミ報道が注意を喚起しています。受入れ病院では、看護師が足りず、独身者や子どものいない看護師が、一般病棟から配置転換されています。感染者だけではなく、同じ病院で働く看護師の間でも差別や偏見で、社会の「分断」が生まれているといいます。「私たちが頑張らないと、助かる命も助けられないことは分かっていますが、こんな気持ちがいつまで続くのか、もう自信がありません」

歯を食いしばり、肩で息をつきながら生きる人たちが増えています。

マスクをつけ、三密を避け、手洗い・うがい、学校もコンビニもスーパーもすべての受付という受付は、ビニールで仕切られた異常な生活が始まってまもなく一年が経とうとしています。今年3月29日、お笑いタレントの志村けんさんの突然の訃報は、新型コロナの恐怖がすぐ身近に迫っていることを伝えました。感染し入院した重篤の患者さんが、家族と一度も会えないまま亡くなって逝く。やがて、小さな骨壺に納まって無言で帰ってくるのです。手を握り、体をさすってもやれず、「ありがとう」も「よく頑張ったね」も交わせない「さようならのない死」(柳田邦男)を遂げて逝くのです。遺骨だけ受け取った家族は、生きているのか死んでいるのか分からない「曖昧な喪失感」(ambiguous loss…ミネソタ大学 Dr.Poulin Boss)をずっと抱えたまま、何にもしてやれなかった後悔と葛藤に苦しむ毎日です。

一時、集中治療室の飽和状態が続いたヨーロッパやアメリカでは、運ばれてくる重篤な患者のうち、若者の治療を優先し高齢者は放置されるという、将来の「生産性」を基準にした命の「トリアージ」が行われたりもしました。病院の廊下に放置されたまま亡くなった犠牲者の家族が、何の治療も施されなかった無念さで、その後トラウマを抱え込んでいることが多数報告されています。コロナによる社会の「分断」と、「生産性」による命の選別が世界を揺さぶっています。

## 試される世界

だれも望んだことではありません。でも、私たちは今こんな時代の真っただ中に生きています。だから、今年の創立記念日は浦上教会のミサではなく、戦時中の映像を見るようなモノクロの味気ない校内放送です。間もなく10年が経ちますが、2011年3月11日の東日本大震災と同じように、今回の新型コロナのパンデミックも、世の中の仕組みがあっという間にひっくり返ってしまいました。いったい何が問いかけられているのでしょうか。人間の生きる力と品性が試されていることは明らかです。そして、私がどのように育てられてきたのかも問われています。

そんな中、1956年に初めて確認された有機水銀の公害「水俣病」と、その病に冒された水俣の人たちの「分断と再生」をテーマにした、石牟礼道子の小説『苦海浄土』が、再び注目をあび熱心に読み直されています。「病と差別とゆるし、つながり合う命そのものに価値がある」と唱えた石牟礼道子の思想に、コロナ後の世界再生のヒントを何とかして見つけようとしている人たちがいるのです(田中優子『苦海・浄土・日本』集英社新書参照)。

## 紡がれた再生の物語・江角ヤス

人の数だけ物語があります。物語は一つひとつの出会いによって紡がれていきます。そんな出会いによって手渡された物語が人を支え、ときに、人はその物語の続きを生きようとします。どんなに時代が変わっても、暮らし方が変わっても、さらに思いもよらない出来事で生きづらくなればなるほど、その物語が生きる力になることを信じているからです。そんな物語をきちんと受けて、その続きを生きていく人をいま世界は必要としています。

86年前、1934年12月8日、今の長崎駅前にある中町教会の片隅で、28人の生徒と7人の教師から始まった純心学園は、創立者である江角ヤスという一人の女性のことを、その「続きを生きる物語」としてここで学ぶ学生たちに手渡してきました。

島根県出身の江角ヤスは、東北帝国大学理学部に在学中、仙台市内にあったカトリック教会の一枚のステンドグラスの前に立ったとき、今まで経験したことのない「胸騒ぎ」(ルカ1・29参照)を覚えます。そのステンドグラスは、1597年2月5日、長崎の西坂の丘で殉教した26聖人を描いたものでした。まだ、キリスト者でもない学生の中に、そのとき何が宿ったんでしょうか。「大丈夫、神があなたと共にいるから」

帝大を卒業後、京都の高校に勤務していた江角ヤスに、仙台出身で長崎の司教になっていた早坂久之助から、「新しい学校を拓くために協力して欲しい」と、声がかかりました。その基礎を据えるため、4年間のフランス留学。その間、日本人への偏見と差別も経験しました。帰国して9日後、1934年6月9日、大浦天主堂で信徒発見の出来事を見届けた、「無原罪の聖母マリア像」の前で、生涯、修道者として生きることを神に誓い、ここから純心聖母会が誕生します。そして、同年12月8日に純心学園は開校したのです(純心聖母会『創立者ヤヌワリオ早坂久之助司教の「使命」と長崎純心聖母会の「創立のカリスマ」』2009年)。

「純心」とはマリアの素朴な信仰と、どんなときにも神に信頼しその思いに従って生きようとする一途な心から名づけられたものです。

でも学園創立から10年後、1945年8月9日、一発の原子爆弾で一瞬にして焦土と化した長崎の町、生き残った命も束になって吐血しているような有り様でした。世界の仕組みが根底からひっくり返った瞬間でした。夢を抱いて学んでいた213人もの愛しい生徒たちが、生きながら焼け焦げて一口の水ももらえず死んでいくのを目の当たりにした江角ヤスは、すでに出会っていたはずのキリストの本当の十字架の意味と、その傍らに立つ聖母マリアの役割をこのとき初めて知らされたのかもしれません。「大丈夫、神があなたと共にいるから」(ルカ1・28参照)、この言葉だけが支えでした。

**「娘は祈りながら清い最期を遂げました。これは純心教育のお陰です。どうか、子どもたちの学校を閉じないでください」**(『純女学徒隊殉難の記録』)これが生き残った親たちの願いでした。「苦しみにもだえて、それでも、ゆるし、ゆるされて一緒に生きる人」になろうとあがく江角ヤス。「マリア様、嫌なことはわたしが喜んで」この時から、ヤスは「キリストと聖母マリアの物語の続きを生きる人」になったのでしょう。それは、倒れても倒れてもなお立ち上がろうとする人の手助けをする人になることでした。

**「わが子よ。この故郷の話を聞いて、何を感じるか?そなたたちのお母さんから受けた血は、どんなものであったのか?世間ではよく、浦上は迫害で有名だと言っている。しかし、迫害があったのは浦上だけではない。浦上が有名なのは、よく立ち上がってきたからだ。倒れても、倒れても、あのように粘り強く立ち上がってきたからだ」**(永井隆『いとし子よ』アルバ文庫、p.255)これは、永井隆が二人のいとし子に残した言葉です。永井隆も江角ヤスと同じ思いをもって、苦しみの中で「分断」され「生産性によって選別されいくいのち」につながって一緒に立ち上がろうとした人です。これが、純心大学が受けて手渡してきた「つながり合ういのちの物語」です。

## 続きを生きる人

弔いの形は人の品性を語ります。その人生をではなく人柄を語るのです。友部の婆さんは92歳で誰の世話にもならず、ぽっくりと去って逝きました。「一日でも

長く生きて、ひと様のお役に立ちたい」が口癖でした。その晩、身内だけでひっそりと通夜が営まれました。夜中の0時を過ぎたころ、一台の軽トラックが家の前に横付けされたかと思うと、革ジャンパーと前掛け姿の中年男がうめき声を上げながら入ってきました。

「何だってよう、ばばあ。きのうまでピンピンしてたじゃねぇか。何だってこんなことになっちまったんだよ」そう言って、男は棺の前に崩れ折れて号泣し出しました。家族はその男を知りませんでした。

「どちら様ですか」

家族が訪ねると

「どちら様って言われたって、誰も俺の名前なんか知らねぇよ」

そう言って涙をこぼしながら焼香し、また声をあげて泣きながら男は涙声で言いました。

「ばばあ、早くくたばれって、いつも俺この人に冗談言ってたんだ。きのうも、たしか言っちまったよなぁ」

「いいえ、そのせいじゃないと思います。急なクモ膜下出血でした」

と家族が言葉を挟むと、男は独り言のようにまた話し出しました。

「いいえね、きょうはこの家にお届けものはないんだけど、営業所に行ったら友部のばあさんが死んじゃったらしいって、課長に言われて。てっきり俺が殺しちまったと思ってさぁ……。俺ね、工場リストラされてさぁ、この宅配の仕事始じめたんだけど、ガキが4人もいるし、年が年で体もしんどくてさぁ、生命保険に入って死んじまった方がよっぽど楽かなと思って。その日、友部のばあさんの所に荷物を届けた後で、とうとう決心して、川原のところで鉄橋を眺めてぼっと座っていたんだぁ。そしたら、このばばあが近づいてきて、ほかほかの握り飯と麦茶を持ってきて、『ほら、お食べ。恩を着せるわけじゃないから大丈夫』って差し出してくれたんだぁ。ばばあ、俺あんとき、握り飯と麦茶を恵んでもらわなかったら、間違いなく鉄橋で首つってたよ。それを恩に思わずにいられるかよ。

**『あんた男だから、お金は上げられない。そういう簡単なことはしてやれないけど、そのかわり、元気が出るまで、毎日おにぎりとお茶は上げられるよ。元気がでたら、勇気も出るから』って。ばばあ、あんたあん時そう言ったよなぁ。90のばばあが元気で、50の俺がへたばってどうするかって、あんとき、本気でそう思った。俺、あんたから元気を貰いいま勇気を出して頑張ってる。そういやあ、きのう妙なこと言ってたなぁ。『あんたもう大丈夫だね!』って。だから俺、言い返したろう。『あぁ、俺はもう大丈夫だから、ばばあ、あんたもうくたばってもいいぞ』って。そしたら、そしたら、本当にくたばってこんな姿になっちまって……ありがとう、ありがとうな。ほな、さいなら。何にも恩返しができないけど、香典だけ置いていくから、ほんじゃ、さいなら、ばばあ」**

香典袋を祭壇に供えると、「あんたは天使みたいなばばあだったなぁ」と言い残し、男は荒々しく作業靴を踏み鳴らして駆け出して行きました(浅田次郎『月島慕情』文芸春秋社、「冬の星座」p.166〜202参照)。

作家・浅田次郎の短編小説「冬の星座」の要約です。そこここにある、人間の切なくも愛おしい営みを切り取った物語です。それは、萎えたいのちをそっと風がなでていくような「再生するいのちの賛歌」です。「わたしは長生きして、ひと様の役に立ちたい」人には心にそっと秘めた思いがあります。それを自分のささやかな人生の中で、形にしていく力をもっている人には理由があります。何のてらいもなく萎えた人をそっと抱きしめるのは、かつて自分が抱きしめられたからです。いざというときとっさに新しいことなど浮かびません。してもらったことをただ真似るだけです。それが、受けた物語の続きを生きている人の証しです。

## あしたが来るのが楽しみ

一年前来日した教皇フランシスコは、日本の若者を前にこう問いかけました。

**「競争力、生産性ばかりが注目される社会で……すべてに退屈し、夢を見ない若者がいます。夢を見ない若者は悲惨です。笑うこと、楽しむことを忘れた人たちがいます。すごいと思ったり、驚いたりする感性を失った人たちがいます。ゾンビのように心の鼓動が止まってしまった人たちです。なぜでしょうか。他者との人生を喜べないからです。……私たちが抱えうる最大の貧しさは孤独であり、愛されていないと感じることです。……重要なことは、何を手にしたか、これから何を手にできるかということではなく、それをだれと共有するのかという点にあることを知るべきです。何のために生きているかに焦点を当てて考えることは、それほど大切ではありません。肝心なのは、だれのために生きているかということです」**(教皇フランシスコ講話集『すべてのいのちを守るため』カトリック中央協議会、p.59〜60)かつて、江角ヤスが学生たちに伝えてきたことと同じでした。

優しさから生まれた何気ない行いが、寄る辺のない人には命よりも大事な一生涯の宝になります。「あぁ、今日は久しぶりに笑った。あしたが来るのが楽しみ」そんなささやかな人生の傍らに純心で学んだあなたがいますように。コロナ禍で苦しむ世界の中で、純心が受け渡して来た「再生の物語」はどんなワクチンよりも効き目があると信じています。どうか、江角ヤスが生きたキリストと聖母マリアの物語の続きを、今日からまた新たな気持ちで生きてみましょう。